

約束を守った花婿

イーディス・ネズビット



メイ・フォースターがジョン・チャリントンと結婚するなんて、誰ひとりとして思っていないかった。とはいっても、彼自身の考えは違っていたようだ。彼がもくろんだことは、不思議なことに、なぜかいつも実現する傾向があつたからである。ジョンはオックスフォード大学に入る直前、彼女に結婚を申し込んだことがあつたが、その時は失笑を買つて断られてしまった。次の求婚は大学から帰省した時だった。またしても彼女はせせら笑い、きれいな金髪の頭をツンとそらして拒絶した。三度目に求婚した際には、「それって、どうしても直らない、悪い癖ね」と言われ、これまで以上に笑い飛ばされてしまった。

メイと結婚したがつていた男はジョン・チャリントンだけではない。村の社交クラブの華^{はな}だつた彼女に、ぼくらは多かれ少なかれ誰もが恋慕の情を抱いていたのである。それはマッシュヤー・カラーやインヴァネス・ケープ⁽¹⁾のように一種の流行となつていた。ということ、ジョン・チャリントンが地元の社交クラブ——ぼくの記憶が正しければ、馬具屋の二階で開いていたクラブ——にやつて来て、全員を結婚式に招待してやるぞと言つたとき、みんなが腰を抜かすと同時に向かつ腹を立てたのも当然であつた。

「えつ、君の結婚式だつて？」

「おいおい、嘘つくな！」

「花嫁さんほどの誰だい？　いつなんだね、式は？」

返事をする前に、ジョン・チャリントンはパイプに煙草^{たばこ}を詰め、火をつけ、それから次

のように語った。

「君たちからたった一つの冗談を奪うことになって申し訳ない——が、ミス・フォースターとぼくは九月に結婚する予定なんだ」

「冗談だろう？」

「また振られたもんで、とうとう頭がいかれちまったな」

「いや」と、ぼくは言いながら立ち上がった。「どうやらホントの話らしいぞ。誰か、ぼくに拳銃を——あるいは、人跡未踏の極地まで行く特急列車の運賃を貸してくれ。この村の半径二十マイル以内にいる唯一の美少女に、チャリントンが魔法をかけやがったみたいだ。おい、ジャック、彼女にかけたのは催眠術⁽²⁾か、それとも惚れ薬⁽³⁾かい？」

「どっちでもないぜ。君たちには決して持てそうもない才能、そう、堅忍不拔の精神さ。それから、世間の男が誰もこれまで恵まれたことのないような幸運だよ」

彼の声には何かぼくを黙らせてしまうようなところがあった。それに、どんなに他の連中が冷やかさうと、これ以上の話を彼にさせることはできなかった。

奇妙なことだが、ぼくらが祝辞を述べると、ミス・フォースターは顔を赤らめ、えくぼまで見せながら微笑^{ほほえみ}を返した。だが、どこから見ても、今だけでなく、これまでもずっとジョーンに胸を焦がしていたかのように思えた。きっと、そうだったのだろう。まったくもって、女とは不可解な生きものである。

結婚式にはぼくら全員が招待された。ブリクサム⁽⁴⁾では、ひとかどの人間であれば、自分以外のいっばしの人間とは必ず知り合いだったからである。ぼくの妹たちは、実際、花嫁のメイよりも花嫁の衣裳の方に関心があった。そして、ぼくの方は花婿の付添い役をする事になった。来るべき結婚式については、午後のティーの集りや馬具屋の二階での社交クラブで物議を醸したが、「彼女はジョンをホントに好きなんだろうか？」という質問がいつも投げかけられた。

二人が婚約して間もないころ、実はぼく自身もそうした疑問を抱いていたのだが、八月のある夕方のことがあって以来、この疑問は雲散霧消してしまった。そのとき、ぼくはちょうどクラブから家に帰る途中で、教会附属の墓地を通り抜けるところであった。村の教会はタイム⁽⁵⁾が茂った丘の上であり、教会の周囲は厚みのある柔らかな芝生になっていたの、人の足音はまったく聞こえなかった。

ぼくは苔^{こけ}でおおわれた低い石塀を音も立てずに飛び越え、墓地の間を縫うようにして進んで行った。ジョンの声が聞こえ、メイの顔が見えたのは、まさにその瞬間だった。彼女は、西に沈む夕陽の残照を顔に受けながら、低くて平たい石碑に座っていた。その顔を見ると即座に、彼女は彼のことを愛しているのだろうかという例の疑問が、永久に消滅してしまつた。メイの顔は、この世のものとは思えないほどの美しさになつていたので——いや、本当に、あんな美しい顔になるなんて信じられないことだ。

ジョンは彼女の足もとに寝そべっていたが、八月の黄昏時の静寂を破ったのは彼自身の声であった。

「ねえ、君。ぼくは、君が望むなら、黄泉の国からだって帰ってくるよ！」

すぐに、相思相愛の問題については疑う余地もなくなったので、ぼくは自分が近くにいることを示すための咳払いをし、そのまま夕闇の中へ消えて行った。

結婚式は九月の初めに予定されていた。その二日前、ぼくは急用でロンドンへ上京しなければならなくなった。ぼくらの村の駅はサウス・イースタン鉄道⁽⁶⁾の駅だったので、案の定、その時の汽車も遅れていた。懐中時計を手にとって、ぶつぶつ言っている、なんとジョン・チャリントンとメイ・フォースターの姿が見えるではないか。二人は腕を組んで互いの目を見つめ合い、思いやりと関心を寄せる駅の赤帽たちなど気にもかけず、人が寄りつかないプラットホームの端っこを行ったり来たりしていた。

もちろん、ぼくはオヤツと思つて立ち止まるような愚か者ではなく、サツと切符売場自身を隠した。そして、汽車がプラットホームに停車してから、やつと大割かばん⁽⁷⁾を持って割り込むように二人の前を通り、一等喫煙車の片隅の席に座った。そうしている間も、ぼくは彼らの方を見ていないという素振りをできるだけだけ見せていた。このような時に余計なことをしないのがぼくの自慢である。だが、もしジョンが一人で旅をする予定なら、途中でまでお供をしたいものだと思つた。実際、そのようになつた。

「やあ、君か」というジョンの陽気な声が聞こえたかと思うと、彼はぼくが乗った車両に鞆を投げ込んできた。「運がいいな。退屈な旅になるなあって、思ってたところなんだ」「どこに行くのかね？」余計なことは言いたくなかったので、ぼくは目をそらしたままで尋ねた。もつとも、見るまでもなく、メイが目を赤く泣きはらしていることは分かっていた。

「ブランブリッジ老人の家だよ」彼はそう言ってから扉を閉め、恋人と最後の言葉を交わすために上体を乗り出した。

「ああ、行つてほしくないわ、ジョン」と、彼女は低い真剣な声で言った。「絶対に何か起こるような気がするの」

「何か起こつて、ぼくが帰つてこないようなことがあると思うのかい？ あさつてはぼくらの結婚式じゃないか」

「行かないで」と、彼女が一心不乱に懇願したので、ぼくが彼であれば、旅行鞆を汽車の外へ投げ出し、それに続いてプラットホームに降りたであろう。しかしながら、彼女が懇願している相手はぼくではない。どうもジョン・チャリントンは精神的な作りが違うようで、自分の意見を変えることは滅多になく、決心に至つては絶対に変えない男だった。

彼は彼女が手袋を脱いで車両の扉に置いた小さな手をなでてやるだけだった。

「義務なんだよ、メイ。あの老人にはとても親切にしてもらったから、危篤になった今、

絶対に会いに行かなきゃならないんだよ。でもね、必ず、必ず、帰ってくるから、間に合うように……」あとに続く別れの言葉は、ささやき声と動き始めた汽車のガタンと揺れる音のせい、聞き取れなかった。

「必ず帰ってきてね」汽車が動き出したとき、彼女はそう言った。

「どんなことがあっても、長居はしないよ」と、彼は答えた。汽車は蒸気を出しながら発進した。プラットホームに立つ小さな姿が消えるのを見届けると、彼は片隅の席に着いて寄りかかり、しばらく黙っていた。

やっと口を開いて、彼がぼくに説明してくれた内容は、自分を遺産相続人にしてくれた名づけ親が、五十マイルほど離れたピースマーシュ・プレイス⁽⁸⁾という所で死にかかっており、ジョンを呼んでくれということなので、どうしても行かねばならないということであつた。

「明日、きつと戻ってくるよ。それが駄目なら、あさつてだ。十分に間に合うさ。ありがたいことに、最近じゃあ、結婚するために真夜中に起きる必要はないからね」

「でも、ブランブリッジ老人が死んだとしたら？」

「死のうが死ぬまいが、木曜日には絶対に結婚するよ！」と、ジョンは答えながら、葉巻に火をつけ、『タイムズ』紙⁽⁹⁾を開いた。

彼はピースマーシュ駅で「じゃあな」と言つて汽車を降りた。ぼくの方は彼が馬車に乗つ

て立ち去るのを見てから、そのままロンドンに行き、その夜は宿泊した。

翌日の午後、帰路は土砂降りだったが、家に着いたとき、妹が次のような質問で出迎えてくれた。

「チャリントン氏はどこにいるの？」

「知るもんか！」と、ぼくは取り付く島もない返事をした。カイン⁽¹⁰⁾の未裔^{まっえい}はすべて、そんな質問をされると、このように気色ばむものである。

「兄さんなら手紙をもらったかもしれないと思ったの」妹は続けて言った。「明日、結婚式で花婿の付添い役をするんだから」

「まだ戻ってないのかい？」当然ながら彼は帰宅していると、ぼくは思っていた。

「そうなのよ、ジェフリー兄さん」妹のファニーはいつも早合点してしまう癖が——特に、同性の友だちにとつて最も好ましくない結論へ、一足飛びする癖が——あった。「まだ帰ってきてないのね。きつと、戻ってこないわ。あのね、いいこと、明日の結婚式はできないわよ」

妹のファニーには、兄をいらだたせるという、他の人間が持っていない特殊な力があつた。

「あのね、いいかい」と、ぼくは荒々しい口調で言い返した。「そんな馬鹿なことを言つて、物笑いの種になるのはやめた方がいいぞ。明日、おまえが初めて列席する結婚式は、

これまでとはまったく違つたものになるんだよ」——ちなみに、これはあとで事実となる予言であつた。

しかし、自信たつぷりに妹を叱責してはみたものの、その晩も遅くなつてから、ジョンの家の玄関に立ち、彼が帰つていないことを聞いた時は、不安を覚えなかつたわけではな
い。ぼくは雨の中を暗澹あんたんとした気持ちで家に戻つてきた。

翌朝は晴れやかな青空と黄金色の太陽に恵まれ、それはもう快い風と美しい雲とで、申し分のない一日になりそうだった。ぼくが寝起きに漠然として感じたのは、完全に目が覚めてまでも、就寝前の不安に直面するのは真つ平ごめんだということであつた。

しかし、ひげそり用の水と一緒にジョンからの手紙を渡されると、ぼくはホッと胸をなで下ろし、肩の荷が降りた気分でフォースター家へ出かけて行つた。

メイは庭にいた。ぼくの背後で番小屋の門扉もんびが回転して閉まつたとき、タチアオイ(11)の間を通して彼女の青いガウンが見えた。それで、屋敷へは行かず、小さな芝生の脇道へそ
れて、彼女の方へ行つた。

「あなたにも手紙を書いて寄こしたみたいね」彼女は前置きの挨拶あいさつもせず、ぼくが近くに来ると、そう言つた。

「ああ、三時に駅で彼を出迎え、そのまま教会へ直行することになつてゐるんだ」
彼女の顔は青白かつたが、目は輝いていて、口のあたりには幸せが戻つたことを雄弁に

物語る穏やかな震えが見られた。

「ブランブリッジ老人にもう一晚だけ泊まっていけと言われ、断る勇気がなかったようです」と、彼女は続けて言った。「とても優しい人なんです。ですが、帰って来てほしかったわ」

ぼくは二時半に駅に着いたが、ジョンに対しては相当むかついていた。ハーハー言いながら駆けつけ、旅のほこりも払わないままで彼女の手を取るなんて、自分を愛してくれる美女に対して無礼この上ないじゃないか。ぼくらの中には、彼女の手を取るためなら、青春時代を棒に振ってもいいと思う者もいたのだから。

三時の汽車がスーツと来て、またスーツと出て行ったが、この小さな駅で降りた乗客は一人もいなかった。はらわたが煮えくり返る思いだった。大急ぎで行けば、なんとかまだ式に間に合うように教会に着くことができる。ああ、しかし、今の始発列車に乗り遅れるとは、なんて間抜けなやつだ！ こんなことをしでかす男は、あいつ以外にいるだろうか？

広告や時刻表や鉄道会社の社則⁽¹²⁾を読みながら、駅の中をぶらぶら歩いていると、この三十五分間が一年のように思え、ジョン・チャリントンに対して堪忍袋の緒が切れそうになった。どんな望みでも抱いた瞬間にかなうのだという自信で、あいつは調子に乗りすぎているのではないか？ ぼくは待つのが大嫌いだ。誰でもそうだろうが、その点では

誰にも引けは取らない。案の定、三時三十五分の汽車も遅れていた。

ぼくは信号機を見ながら、イライラするあまり、齒の間でパイプをかんだり、足を踏み鳴らしたりしていた。ほどなく、カタンという音がして、信号用の赤旗が降りた。それから五分後、ぼくはジョンのために仕立てていた馬車に乗り込んで、身を投げ出していった。

「教会へ行ってくれ！」誰かが扉を開めたとき、ぼくはそう言った。「チャリントン氏は今の汽車にも乗ってなかった」

この時にはもう不安が激怒に取って代わっていた。あの男はどうなってしまったのであるのか？ 急病になるなんてことがあるだろうか？ 今まで一日だつて病気になることなどないじゃないか。たとえ病気になるにせよ、電報ぐらい打とうと思えば打てただろうに。メイを裏切つたのではないかという考えは決して、いや一瞬たりとも、ぼくの頭に浮かばなかった。そうだ、何か恐ろしいことが彼の身に起こつて、そのことを花嫁に伝える任務をぼくは担わされたのだ。このぼくではなく、誰かが代わつて彼女に伝えることになるように、いつそのこと馬車がひっくり返つて、自分の頭が砕ければいいのとさえ思つた。ぼくとしては——いやいや、これは物語とは関係ないことだ。

馬車が教会墓地の門の前で停止したのは四時五分前であつた。その墓地の屋根つき門から教会の車寄せまでの小道の両側には、熱心な見物人が列をなして並んでいた。それで、ぼくは馬車から飛び降りて、見物人たちの間を通り抜けて行つた。ところが、教会の扉に

近い列の前の方に我が家の庭師がいたので、ぼくは立ち止まった。

「みんな、まだ待ってるのか、バイルズ？」そう尋ねたのは、ただ時間をかせぐためであつた。というのも、待機する群集に特有の注意深い態度から判断して、それぐらいは分かつていたのである。

「待ってるか、じゃって？ とんでもねえだよ、旦那さん。そうさな、もう終わつちまつたはずじゃ」

「終わつただと？ それじゃ、チャリントン氏は来たのか？」

「ぴったり時間どおりじゃつた。どういふわけか旦那さんがおられんかつたもんで、残念じゃつたに違いねえ。旦那さん、ちよいといいですかい」そう言つて、バイルズは声を低くした。「あんな姿になつたジョンの旦那は、今まで見たこともねえだよ、まつたく。わしの考えじゃ、酒をしこたま飲んどられたはずじゃ。服はほこりだらけで、顔は経帷子きょうかたびらみてえに真つ白じゃつたから。わしは、あの旦那の様子が気がかりじゃが、教会の中にいる連中も、いろんなことを言つとるよ。いいですかい、どつか途轍もねえ悪い所があるんじやよ、ジョンの旦那にやね。それでもつて、強い酒を飲んでみなさつたんじや。まるで幽霊みてえじゃつた。真つ直ぐ前を見たまんま教会に入りなすつた時にや、わしらに目を向けたり、声をかけたりはなさらんかつた。いつも立派な紳士だつた旦那じゃがね！」

こんなに長々とバイルズが話をするのを聞いたのは初めてだつた。教会の境内に群がっ

ていた人たちは、ヒソヒソと言葉を交わしたり、花嫁と花婿に投げる米と上靴⁽¹³⁾を準備していた。鐘を鳴らす係の男たちはロープを手に持って、新郎新婦が姿を見せたら、鐘を陽気に鳴り響かせようと待ち構えていた。

教会の方から聞こえる小さな声で、二人が出てくるのが分かった。実際に、二人は姿を現したが、バイルズの言ったとおりであった。ジョン・チャリントンはいつもの彼とまったく違っていた。コートはほこりだらけで、髪はボサボサだ。どこかで喧嘩でもしたようで、まゆ毛の上に黒い痣^{あざ}ができています。顔は死人のように真っ白だ。しかしながら、その白さは花嫁の顔の白さほどではなかった。彼女はさながら象牙の彫像のようであった——ドレスも、ヴェールも、オレンジの花も、顔も、何もかも。

二人が出てくると、鐘の係たち——全部で六人——は身をかがめた。結婚式の陽気な鐘の音を期待していた人たちの耳に入ってきたのは、あにはからんや、ゆるやかに鳴る甲^{とむら}いの鐘の音であった。

鐘の係たちの馬鹿げた冗談に対して、戦慄^{せんりつ}がぼくらの全身に走った。しかし、鐘の係たちはロープから手を離すと、脱兎のごとく鐘楼の階段を駆け下りた。ぶるぶると体を震わせている花嫁の口もとには暗い影が浮かんでいたが、花婿はそのまま彼女を導き、みんなが米を握ったままで立っていた小道を進んで行った。だが、その米は一度も投げられず、結婚式の鐘が鳴ることもなかった。鐘の係たちは、間違いを正して再度やり直すように説

得されても、ののしり言葉をつぶやきながら、それだけは真つ平ごめんだと言っていた。

死人のいる部屋のような静寂の中で、新郎新婦が馬車に乗り込むと、そのあとで扉がバタンと閉まった。すると、招待客や見物人の舌の束縛がゆるみ、怒りやら驚きやら推測の言葉やらで、さながらバベルの塔⁽¹⁴⁾のような騒々しさになった。

「花婿の状態が前もって分かっておつたら」フォースター老人は、ぼくらの馬車が走り出すと、そう切り出した。「なぐり倒して教会の床にのしてやりましたのに！ 必ず、そうしてやって、娘と結婚なんかさせはしませんでしたぞ！」

そう言つてから、彼は窓から顔を出した。

「ぶっ飛ばせ！」と、彼は御者に向かつて叫んだ。「馬たちに情け容赦するな！」

御者は言われたとおりにした。こちらの馬車が花嫁の馬車を追い越すとき、ぼくはそちらの方を見ないようにし、フォースター老人もまた顔をそむけて悪態をついていた。そうして、ぼくらの馬車の方が早く家に着いた。

焼けるような午後の太陽のもと、玄関口に降り立って三十秒ほどすると、砂利道をやって来る馬車の車輪の音が聞こえた。馬車が石段の前で停止すると、フォースター老人とぼくは走り寄った。

「大変だ、馬車はもぬけのからだ！ だが——」

ぼくは即座に扉を開けたが、目に入ったのは……

ジョン・チャリントンがいた形跡はない。妻のメイについては、白いサテンの花嫁衣裳が丸まった塊りとなって、半分が馬車の床に、半分が座席に横たわっているだけだった。

花嫁が父親に抱きかかえられて外へ出されるとき、御者が「ここまでは真っ直ぐ来たんじゃないよ、旦那さん」と言った。「神様に誓ってもええが、誰も馬車からは降りとりやせんよ」

ぼくらはメイを花嫁衣裳のまま家に運び入れ、ヴェールをはぐつてみた。それから彼女の顔を見た。あの顔を忘れることなどできるだろうか？ 白い——真っ白い顔が苦悶と恐怖でゆがんでしまい、それ以後は夢の中でうなされた時を除いて、一度も見たことのないような、そんな恐怖の表情が浮かんでいた。それから、髪の毛——彼女のまばゆいばかりの金髪——は、実際、雪のように白くなっていた。

恐怖とミスリーのあまり、メイの父親とぼくが半狂乱状態で立っていると、一人の少年——電報配達少年——が、並木道に沿って近づいてくるのが見えた。オレンジ色の封筒を渡されたので、ぼくは破って開いてみた。

チャリントン イチジハン エキニイクトチュウ

ドックカート⁽¹⁵⁾ カラ ナゲダサレ ソクシ!

とはいえ、ジョン・チャリントンは、三時半に村の教区教会で、メイ・フォースターと結婚式を挙げたのである。教区民の半分を前にして。

「死のうが死ぬまいが、絶対に結婚するよ！」

家に向かう馬車道で、一体全体、あの馬車に何が起こったのだろうか？ 誰にも分からない——今後も分からないだろう。ああ、メイ！ ああ、かわいそうに！

一週間もしないうちに、タイムにおおわれた丘の小さな教会墓地——二人が逢瀬おうせを楽しんだ教会墓地——で、メイは夫のそばに埋葬された。

このようにして、ジョン・チャリントンの結婚の約束は果たされたのである。

【訳注】

- (1) マッシュャー・カラーは十九世紀後半に社交界の若者たちの間で流行した長い窮屈なカラー（マッシュャーとは「女殺し」の意）。インヴァネス・ケープは格子縞模様で、長く、ゆつたりした毛織または梳毛毛織さもものケープ。
- (2) オーストリアの医師メスメル（F. A. Mesmer）が一七七五年に唱え、初めて医療に用いた動物磁気（animal magnetism）によるもの。
- (3) 日本では飲むもの（イモリの黒焼きの類）だが、英国では目にかける（または塗りつける）。シェイクスピアの喜劇『夏の夜の夢』では、妖精パックが惚れ薬を間違って別の人物に使用したので、恋人関係に大混乱が起こる。
- (4) イングランド南西部デヴォン州の南東にある海岸町（当時は村）。ただし、この物語における地名と鉄道名は位置関係の点で矛盾している。
- (5) シソ科タチジャコウソウ属の芳香を持つ多年生植物で、ハーブの一種として肉類、スープ、シチューの香り付けや鎮咳や防腐薬として使われる。
- (6) ロンドンのチャリング・クロス駅とドーヴァー海峡に臨むフォークストンを結ぶ鉄道。ロンドンから北部へ延びる鉄道と違って、発着の遅れと能率の悪さで有名だった。
- (7) 長方形で両側に開く鞆。一八六八〜九四年に四回首相になった自由党党首で、保守党のディズレー

リと対抗したグラッドストーン (William E. Gladstone) の名にちなむ。

(8) イースト・サセックス州にピーズマーシユという町があるが、ブリクサムから少なくとも百マイル以上離れている。

(9) ロンドンの新聞で『ロンドン・タイムズ』とも呼ばれる。一七八五年、『デイリー・ユニヴァーサル・レジスター』として創刊され、一七八八年から『タイムズ』となる。

(10) アダムとイヴの長男で、弟アベルの供物が神に納められ、自らの供物は顧みられなかったことを恨み、弟を殺害して神に追われた(旧約聖書の「創世記」四章を参照)。

(11) 地中海地方原産で、観賞用に庭園で栽培される越年草。全体に毛を密生させ、葉は長柄を持ち、心臟状円形で、縁に鋸齒^{きよし}がある。花言葉は豊かな実り、熱烈な恋。

(12) 当時の鉄道会社の社則は(少なくとも建前は)非常に厳しく、列車や駅のあらゆる場所に掲示してあった。

(13) 結婚式のあと教会から出てくる新郎新婦の背に、幸運を願って米を、可愛い子供たちの誕生を祈って古靴を投げつける(現代では自動車に結びつける)風習がある。靴は陰門の象徴で、民話によれば、靴の中に住むお婆さんは生殖器の中にいることを意味し、子だくさんである。

(14) 頂上が天に達するほどの巨大な塔で、ノアの子孫たちが建てようとしたが、その僭越さがエホバの神の怒りにふれ、人々は互いに言葉が通じなくなつて離散した(旧約聖書の「創世記」十一章を参照)。

(15) 遠乗り用に用いられる軽装二輪馬車。背中合わせの二つの座席があり、座席の下に獵犬を乗せた。

【作品と作者について】

イーディス・ネズビット (Edith Nesbit) は一八五八年八月十九日に当時のサリー州ケニントン (現在のロンドン・ランベス自治区) で生まれた。学校教師だった父親はイーディスが六歳の時に亡くなったが、彼女は病弱の姉の転地療養のためにヨーロッパ各地を転々としながらも、フランスで教育を受けさせてもらった。もともと詩人を志していたが、二十一歳の時に銀行員のヒューバート・ブランドと妊娠七ヶ月で結婚し、彼の影響を受けて女権運動や社会主義運動に関心を持つようになった。そして、彼女と恋の噂もあった劇作家バーナード・ショーや社会主義者ウェップ夫妻とともに、一八八三年に社会の穏健な改革を目的とするフェビアン協



会の創設に参加し、夫と一緒に協会の機関誌『トウデイ』の共同編集者となった。結婚後は夫の病気や女性関係 (二人の子供を引き取って自分の子供と一緒に育てた) に悩まされ、生活のために雑誌用の短篇小説を書きまくった。このような時期に書かれたのが本篇である。

文学雑誌『テンプル・バー』の一八九一年九月号に掲載された本篇「約束を守った花婿」の原題は「ジョン・チャリントンの結婚」(John Charrington's Marriage)。

一八九三年には短篇集『不気味な話』(Grim Tales)に再録された。

台所が火の車のバスタブル家の六人の子供たちが大奮闘する『宝探しの子供たち』(The Story of the Treasure Seekers, 1899)はネズビットの出世作で、リアリズムの児童文学における古典として非常に名高い。また、五人の子供たちが砂の妖精に願いを叶えてもらうことで思わぬ失敗や事件が起こる『砂の妖精』(Five Children and It, 1902)は、それまでは異界の住人だった妖精が人間の現実世界に顔を出して親しみやすい姿で描かれた点で「エヴリデイ・マジック」と呼ばれ、二十世紀の児童文学に大きな影響を及ぼしたと言われる。ネズビットは四十冊以上の少年少女物語を出版し、一九二四年五月四日に六十五歳で人生を終えた。